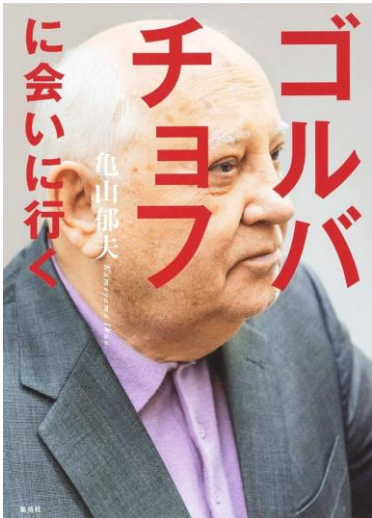


愛知学院大学 第212回モーニングセミナー



ゴルバチョフに会いに行く

ウクライナ悲劇の原点を探る



亀山 郁夫

名古屋外国語大学

モーニングセミナー 2023年11月14日

なぜ、いま、ゴルバチョフなのか？

11月19日の日経朝刊 日曜随想「良心の試練」

宗教か、歴史か

頭を去らないドストエフスキーの問いかけ

「永遠の調和のために、罪なき少女の一粒の涙を

犠牲にできるのか」→「黙過」というテーマへの関心

「故国」への根源的欲求 民族的アイデンティティの行方

2022年8月30日、ゴルバチョフ死す

ウクライナ戦争の帰趨を見きわめることなく死ぬということ



あすへの話題

元ソ連大統領ゴルバチョフの訃報を、旅先で知った。感慨は薄く、時の流れの残酷さを改めて思い知らされた。はるか昔、彼が登場する以前のロシアでスパイ容疑を受け、勾留された過去がある私にとって、ゴルバチョフ改革の成否は、私自身の将来とも深く関わる問題だった。それならば、もう少し感慨深い何かがあって当然だった。

ソ連トップとしての短い在任期間中、世界政治に彼が果たした役割は、計り知れぬものがある。けれど、自らが誇りとすべき最大の功績が、彼自身本心ではけっして望むことのなかった国家崩壊という皮肉な事実もあり、いわばそのジレンマと戦い続けた後半生だったと私は勝手に想像している。

そのゴルバチョフとの単独会見が実現したのは、ウクライナの首都キーウでの政変から間もない2014年12月。ただし当時の私の関心は、ウクライナ問題よりむしろ彼が、大統領の座を追われる契機となった1991年夏のクーデター（「プッチ」をご記憶だろうか？）にあった。彼の口から、その真実を聞きたかった。あの時幽閉先のクリミアで何を考えていたか。行動が黙過か、のせめぎあいのなかで、たとえ一瞬でも祖国を見限った瞬間があるのではないかと。

だが、私の「野心」は早々に挫折した。世界史に名を刻むほどの政治家が、『回想録』を覆すデリケートな真実を告白するはずもない。会見を終えた私は、「大失敗」の苦い自覚を抱きながら帰国したが、それから8年経った今も、私のなかでこの問いは消えない。ウクライナ戦争の帰趨（きすう）が見えないなか、ソ連崩壊のドラマは、ますます謎めいた光を放ちはじめている。

ゴルバチョフへの問い

「ゴルバチョフへの問い」(日経新聞／あすへの話題)

元ソ連大統領ゴルバチョフの訃報を、旅先のホテルで知った。感慨は薄く、時の流れの残酷さを改めて思い知らされた。はるか昔、彼が登場する以前のロシアでスパイ容疑を受け、拘留された過去がある私にとって、ゴルバチョフ改革の成否は、私自身の将来とも深く関わる問題だった。それならば、もう少し感慨深い何かがあって当然だった。

ソ連トップとしての短い在任期間中、世界政治に彼が果たした役割は、計り知れぬものがある。けれど、自らが誇りとすべき最大の功績が、彼自身本心ではけっして望むことのなかった国家崩壊という皮肉な事実もあり、いわばそのジレンマと戦い続けた後半生だったと私は勝手に想像している。

そのゴルバチョフとの単独会見が実現したのは、ウクライナの首都キーウでの政変から間もない2014年12月。ただし当時の私の関心は、ウクライナ問題よりむしろ彼が、大統領の座を追われる契機となった1991年夏のクーデター(「プッチ」をご記憶だろうか?)にあった。彼の口から、その真実を聞いたかった。あの時幽閉先のクリミアで何を考えていたのか。行動か黙過か、のせめぎあいのなかで、たとえば一瞬でも祖国を見限った瞬間があるのではないか、と。

だが、私の「野心」は早々に挫折した。世界史に名を刻むほどの政治家が、『回想録』での証言を覆すデリケートな真実を告白するはずもない。会見を終えた私は、「大失敗」の苦い自覚を抱きながら帰国したが、それから八年経った今も、私のなかでこの問いは消えない。ウクライナ戦争の帰趨が見えないなか、ソ連崩壊のドラマは、ますます謎めいた光を放ちはじめている。(『日経新聞』 9月15日)

ウラジーミル・ポズネルによる追悼

「彼は、20世紀でもっとも偉大な為政者の一人として歴史のなかに入っていくだろう。いつの日かすべてのロシア人がそのことを理解するだろう」

なぜ、旅に出たのか

◆なぜ、旅に出たか？ 東日本大震災被災地への旅

朝日新聞の記事「ロシアよ、兄弟を殺すとは」に対する批判

「ロシアを憎む、アメリカを憎む」→ネット上で炎上 痛手を癒したい

◆ソ連邦の崩壊は、自壊か、解体か？

32年前の私に見えなかった「事実」とは何なのか……ドラマを知る
ゴルバチョフの罪を問えるのか？

◆個人的な関心、個人的な動機

基盤の喪失 ソ連時代の芸術家たちの二重の犬死

マヤコフスキー、エイゼンシュテイン、メイエルホルド……

1991年を契機に、がらりと評価が変わる。

個人的な動機とは？

研究者としての私の道

- ・大学時代ドストエフスキーに熱中、その後、ロシアの前衛詩人の研究を17年間いそしむ。
 - ・スターリン時代の研究『磔のロシア スターリンと芸術家たち』(大佛次郎賞)
- 独ソ戦を勝ち抜いた2700万人の命はどうなるのか。
- ・トラウマの疼き ウリヤノフスク事件

ウリヤノフスク事件

■1984年の事件

8月14日 レーニンの故郷ウリヤノフスク
で拘束→ブラックリスト入り

何のためにロシア文学を学び、研究してきたのか
一生、消えることのない傷→幸運

■社会主義の「神」



第二の原点 ソチ五輪とクリミヤ併合

2014年2月 歴史的転換点 ソチ五輪×マイダン革命

歴史は、論理や正義ではなく、あるいは人道的な観点ではなく、力と怨念を梃子にして動く。





象徴的な、不吉な出来事



Цвет колец в верхнем ряду — голубой для Европы, чёрный для Африки, красный для Америки, в нижнем ряду — жёлтый для Азии, зелёный для Австралии.

歴史が、論理や正義ではなく、あるいは人道的な理念ではなく、**力と怨念**を梃子にして動くと感じたのは、この時である。クリミアは、依然、ウクライナの一部である。もしクリミアの住民が独立を求めるのであれば、憲法の手続きにしたがって然るべきプロセスを踏まなくてはならない。これは、当然のことだ。だが、この当然のことが、時として無効とされ、それが国際的に無言の承認を得るといふ異常事態が存在する。力と怨念を梃子にしてそうした事態が発生する。ウクライナがソ連から独立した背景にも、力と怨念が根底にあった。**怨念を持たなければ、歴史は動かない**ことを証明した。

怨念という言葉に導かれて、私はふとゴルバチョフについて考えはじめた。彼に欠けていたのは、この怨念ではなかったろうか。

怨念は、動物の嗅覚で他者の怨念を嗅ぎ分ける。あるいは警戒心と言ってよい。怨念と警戒心があれば、ゴルバチョフは、周到に新連邦条約へのサインを終えてからクリミヤの保養所に発ったはずだ。私にはかすかながら不審が芽生えた。ゴルバチョフは、ことによるとあの八月、何かしら病的な無関心に陥っていたのではないか。

力と怨念 二つの梃子

1 ロマンティックな理想新ユーラシア主義

ロシア、ベラルーシ、ウクライナは一体であるべき

(ロシアの伝統的思考、ソルジェニーツィンら右派の思考)

2 NATOの脅威

その恐怖は、トラウマ的なもの。分断の恐怖

ウクライナ悲劇の原点を求めて、ウクライナへの旅に出る

なぜ、ウクライナはロシアの抱擁を嫌うのか、兄弟なのか

マレーシア航空機撃墜事件 2014年7月17日

ウクライナ共和国ドネーツィク州で撃墜 298(283+15)名死亡

私のなかの悪魔の囁き

《この事実を、ロシアは何とか隠しおおせないものか？》

「公共の嘘(public lie)」

「嘘」のはじまり

「マレーシア機撃墜はウクライナ親露派を非難するためにウクライナの新政権が仕組んだもの」

「ウクライナ国内で起こったのだから、ウクライナ責任」

ゾーンへの旅 1 チェルノブイリ

2014年9月3日

1986年4月26日1時23分(モスクワ時間)に、ウクライナ・ソビエト社会主義共和国のチェルノブイリ原子力発電所4号炉で起きた原子力事故



ゾーンへの旅 2 バービーヤール

2014年9月6日

1941年8月から9月にかけて、ウクライナの首都キエフの中心部で3万人近いユダヤ人がナチスドイツの手によって虐殺された。



2014年12月19日



「ゴルバチョフの魂をつきとめることは不可能だ」

ゴルバチョフ財団(Горбачев-Фонд)

非政府非営利組織いわゆるNGOの組織として1991年に設置



ペレストロイカ(改革)とグラスノスチ(公開)

■ペレストロイカ (Перестройка)

第1段階(1985年～88年末まで)模索・試行錯誤期

第2段階(1899年春～90年初めまで)民主化期

第3段階(1990年～91年まで)自由奔放な社会・民族・政治諸勢力による闘争開始

■グラスノスチ(Гласность)

情報公開

スターリン時代の悪の告発、「カティンの森」事件謝罪

文学遺産の解禁

ソ連崩壊のプロセス

◆1922年

ソビエト連邦結成条約

ソビエト社会主義共和国連邦(国名 C C C P)

◆1991年8月 条約締結予定 → プッチの勃発

新連邦条約

ソビエト主権共和国連邦(国名 C C C P)

◆1991年11月

主権国家連邦(C C F) 7つの共和国 8共和国ボイコット

◆ウクライナ参加せず 独立宣言

プッチ、1991年8月のクーデタ

- ・権力の二重構造化

ソ連大統領となり、各共和国に大統領制が導入されたことで、権力の二重構造化が生まれる。

- ・新連邦条約の締結でソ連邦を構成する15共和国の権限を拡大しようとした改革派のゴルバチョフ大統領に対し、条約に反対するゲンナジー・ヤナーエフ副大統領ら保守派グループがクーデターを起こす。だが、ロシア共和国のボリス・エリツィン大統領を中心とした市民等の抵抗により失敗に終わり、ソ連の崩壊を招いた。

対立の根本は、**連邦税の徴収方法**にあった。徴収か、上納か？

国民の声 ウラジーミル・ポズネルとの対話 2011・2・28

「ソ連崩壊のためにあなたがしたことを残念とは思っていないのか？」

「ソ連を崩壊させたことで私はあなたに対してとても怒っている」

「どうしてソ連を崩壊させる必要があったのか。それにたいしていくら金を貰ったか？」

「ソ連初代大統領殿、貴殿にノーベル平和賞が授与されたのは、東西ドイツの統一への貢献ではなく、ソ連解体に対してであるとお思いにはなれませんか？」

<https://www.1tv.ru/shows/pozner/vypuski/gost-mihail-gorbachev-pozner-vypusk-ot-28-02-2011>



ゴルバチョフへの問い 16-6

6 後悔していること

私が経験した唯一の幻滅は、それは、意図したことが成し遂げられなかったことです。つまり、ソ連を維持できなかったことです。そして、ペレストロイカは中断させられました。当時も、そして今も、私は、ソ連にとって、変革は死活問題だったと考えています。そして、政治も、歴史も、仮定法を嫌うものですが、あの時と同じ機会が与えられたら、きっと私は、戦術や改革の手順を変えたうえで、もう一度、戦略的に改革をはじめたでしょうね。

ゴルバチョフの問い 16－8

8 1991年段階でのロシアの将来像

「今日までに公刊された資料が裏付けてくれると思いますが、私は、最後の最後まで、連邦国家維持のために闘いつづけました。国家が崩壊した場合のカタストロフィックな帰結について私はいろいろ警告もし、予言もしましたが、残念ながら、それらの多くはすべて当たってしまいました。そしておそらく、そのもっとも端的な例が、今日に見るウクライナ問題であるわけです」

失敗に終わったインタビュー

問えなかった問うべき問2問

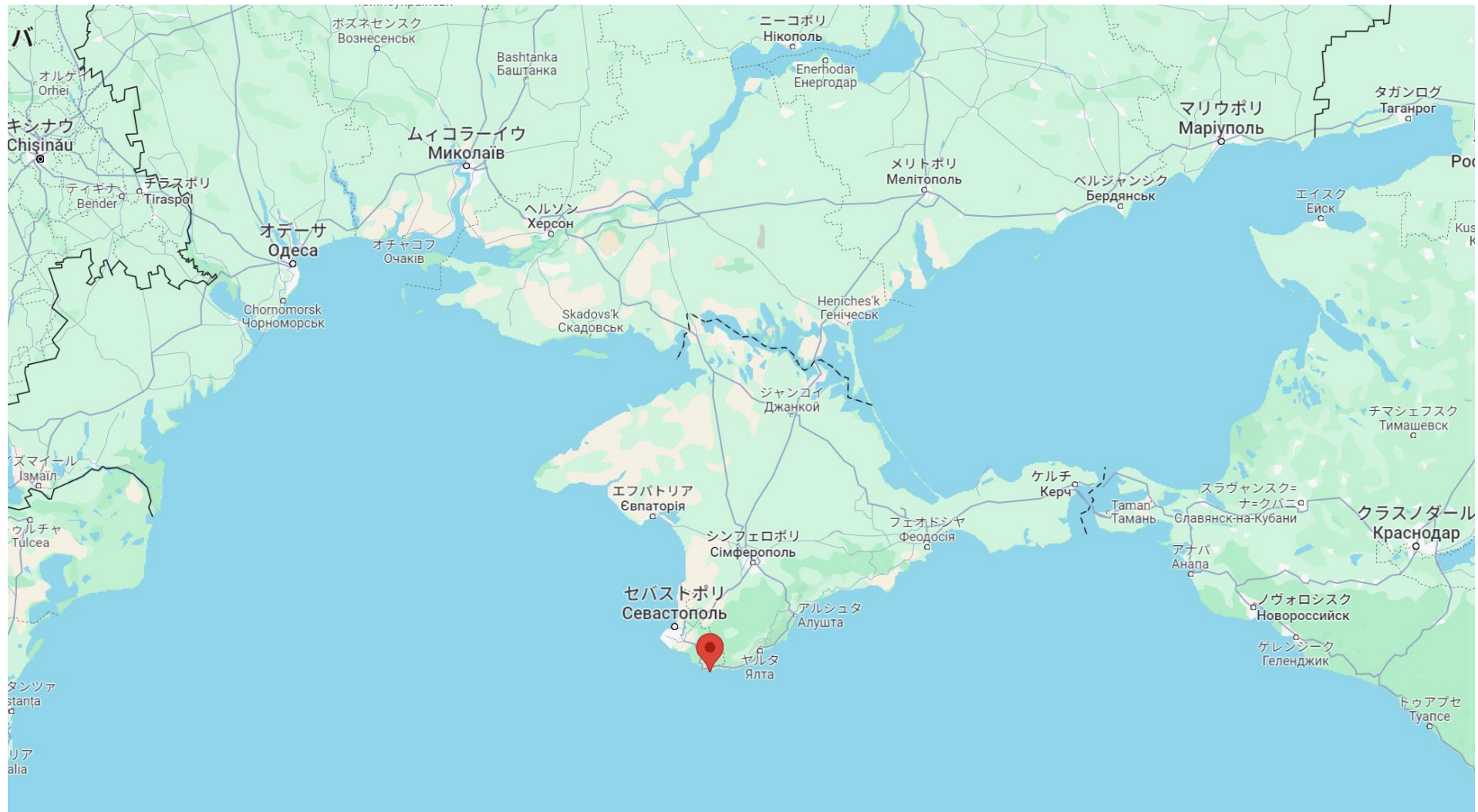
1、あなたは、いつ、どの段階でソ連社会主義の将来に見切りをつけたのか？

2、あなたは、あなたが主張した新連邦条約の限界を見抜いていたのではないか？

最初から、不可能なインタビューだった？

1991年、別荘地フォロスの夏





ゴルバチョフへの疑い 1

ワジーム・メドヴェージェフによると、ゴルバチョフの盟友たちでさえ、最初は彼の関与を疑った。……シェワルナゼはモスクワ、クーデターに抗議する大群衆を目のあたりにしながら、「ゴルバチョフはどこにいるんか？ この事態には彼が何かの形で関与しているのではないかだろうか？」と疑問を口にした。

(チェルニャーエフの回想)

「回線は切断されていなかったし、我々は誰も監禁などされていなかったとか、どこでも好きな所に行けたし、ゴルバチョフに忠実な重武装の大隊がいつでも彼を救出できた云々、と読んだり聞いたりする。……私にいわせれば、人を愚弄するたちの悪い噂である」

(トーブマン『ゴルバチョフ』より)

ゴルバチョフへの疑い 2

「もっとも大切なことは、1985年以降、われわれが行ってきたことがすでに現実的な成果をあげていたということだ。……私は、責任感、尊厳、心配りをもつソビエトの人々におめでとうを言いたい……そしてこれは、ペレストロイカのもっとも偉大な成果なのだ」

翌日の記者会見でゴルバチョフはフォロースでの経緯を語り、最後に謎のようなひと言を付け加えた。

「いずれにせよ私はあなたがたにすべてを言いませんでした。ぜったいにすべてを言うことはないでしょう（Я вам все равно не сказал всего. И никогда не скажу всего.）」

「すべてをなすがままにさせたのです」(KGB大佐レフ・トルストイ)

ゴルバチョフへの疑い 3

ソ連最高会議議長ルキヤノフの証言

「モスクワに戻れば、ゴルバチョフはすべてを制止できたのです。しかし出発しなかった」

KGB議長クリューチコフの証言

「ゴルバチョフは当時、日に日に影響力を強めていくボリス・エリツィンを何よりも恐れていました。彼はつねにエリツィンを恐れ、彼を整理するためにいかなる手段にも応じる覚悟でした。その一つに、国内に非常事態を導入するという口実のもとでの逮捕がありました。われわれの同志がフォーロスでゴルバチョフに暇を告げようとしたとき、彼はこう言ったのです。『そうしましょう！ 行動してください！』と」

ゴルバチョフへの疑い 4

国防次官兼陸軍総司令官ワレンニコフの証言

「フォロースでのわれわれの会見は無駄に終わりました。その結果はきわめてあいまいなものです。ゴルバチョフが、何か緊急の問題について決断を下したり、重いテーマについてはっきりと言わなくてはならないとき、大半の場合がそうでしたが、じつに曖昧模糊としたものでした。結論として彼はこう言いました。《畜生め、好きなように行動したまえ。ただし、私の意見は伝えてくれたまえ》。そこで私たちは互いに目を合わせました。何の意見だというのだ？ イエスでもない、ノーでもない。つまり彼は、これらの行動に対して良からうと言って同意を示しながら、非常事態は望まないと自ら宣言したわけです」

ゴルバチョフへの疑い 5

ソ連副大統領ヤナーエフの証言

「この男は、祖国と民衆と友情を裏切りました。私の人生の最大の過ちのひとつ、それは、ゴルバチョフを信じたことです。……そうです、彼は単純に臆病者でした。臆病者であっては大統領となる資格はない。彼は、あの事件を扱った本のなかで、フォロースの彼のもとにやってきた代表団から非常事態宣言のすみやかな導入に関する情報を耳にして、憤慨し、ロシア式に罵倒し、叫んだと書いています。そんなことはまったくなかった！ ゴルバチョフはただちに二つの質問をしたのです。だれが君たちを派遣したのか、エリツィンは逮捕してあるのか？ とです。われわれがもしエリツィンを逮捕し、そのことをゴルバチョフに報告していたら、万事がこれとはちがうものになったでしょう」

「彼はわたしに率直にこう言いました。いざとなったら決然と行動してください。ただしで流血はなしです。フォロースではだれも彼を封鎖しませんでしたし、封鎖しようともしませんでした」

ゴルバチョフの誤算 払拭できない疑念

「クーデターは失敗した。だが、モスクワへ戻ったゴルバチョフも行動を誤った。**なぜ彼はホワイトハウスの群衆のもとに直行しなかったのだろうか？**」(トーブマン)

(ライサ夫人のトラウマ。8月27日、52通の手紙を焼却。ゴルバチョフも、25冊のノートを焼く)

「記者会見では、既に信用を失墜した共産党を改革すると宣言し、自分の国がいかに変容したか分かっていない男の姿をさらけ出してしまった」(同)

ゴルバチョフは、クーデタ支持派へと追い込まれ、党書記長を辞任する。KGB本部の前には、怒りに燃える群衆が集合していた。

「連邦国家」か「国家連合」か

エリツィンの背後に、側近中の側近ブルブリス、大統領顧問シャフライを中心とした優れたブレーン、アメリカの後押し。

11月14日 「連邦国家」でエリツィン合意

11月25日 「国家連合」がエリツィン本意

「もうがまんできない。私は連邦崩壊に加担するわけにはいかない。あとは君たちだけに任せる。好きなようにお決めなさい。ただし、祖国の運命を決めたすべての責任は君たちみんなのものだ、ということをお忘れなように」

12月31日 ソ連崩壊

「大統領辞任後、私はこの12月の一連の出来事を何度となく思い返した。そのつど、あれ以外の行動を取る法的根拠は私にはなかったという結論にたどりつくのだ。11共和国の最高会議がミンスク合意を承認した時、その決定に逆らう行動に出たとしたら、それは国家を大量虐殺に巻き込むことを意味した。そうなれば、世界的破局に発展しかねない」(『回想録』)

印象

「ゴルバチョフは、ソ連大統領だった。しかし同時に、共産党書記長でもあった。この相矛盾する立場にいたことが最大の問題だった。また、副大統領以下の人事はすべて彼の手において行われたはずである。つまり彼のもとには、全権があった。国家がいかにぎくしゃくしていたとはいえ、彼は、することは何でもすることができた。重大な違反に対しては、それなりの対応をすることができた。だが、彼はいっさい手を打たなかった」(『ゴルバチョフに会いに行く』)

おわりに ウクライナ戦争の根源

ウクライナはどこへ行くのか？ →EU、NATOと一体化

「ウクライナは勝てない」(トッド)の意見は正しいか。何が勝利か。

ウクライナの抵抗は、宗教というよりも、歴史の抵抗だったと考えるのが妥当。

プーチンのユーラシア主義的ヴィジョンは、一種のユートピア国家。スターリン主義的独裁国家に転落か、民主勢力の台頭か。

ロシア革命100年の記憶と永遠に終わらない戦争

象徴的価値としてのクリミアに核が持ち込まれる日

解決の道は、双方の「断念」にしかない。

おわりに 千年の奴隷

全一性、ロシア的精神性とは何か？

「終わりの民」、千年の奴隷…… 終わらない独裁

目覚めるときは来るのか？

新しい価値を生み出すのか？